

体育大会によせて



校長 三輪 秀文

私は、生徒昇降口の黒板に“今日の一言”を書くようにしています。体育大会の翌日も、きびきびして、すがすがしい体育大会の成果を、3年生のリーダーシップのたまものであると評価しました。また、2年生のあるクラスが、学年競技の「ハリケーン」の最中に、竹が折れるというアクシデントにもかかわらず、最後まで競技を続けた潔さを体育大会の“さわやか賞”と褒めたたえました。

ところが、その日の放課後、ある先生から、その黒板を見ていた1年生の一人が、「3年生と2年生のことしか書いてない」と不服そうに言っていたということを聞かされ、「しまった！」と思いました。と同時に、誰か読んでくれているのだろうか、半信半疑に続けてきた“今日の一言”でしたが、関心を持ってもらっていることにちょっとうれしくなりました。



次の日、「体育大会 第二弾」と称して、遅ればせながら1年生のことを次のように評価しました。

「移動の時のすばやさは立派だった。そして、競技の時の表情は真剣そのものだった。きつときみたちが3年生になったら、四中の体育大会を一步も二歩も発展させてくれるだろう。すばらしい体育大会、先輩たちに感謝を！」

このようなことを書きました。関心を持っていていたら、うれしいのですが...

さて、今年で26回目を迎えた体育大会ですが、開会式の時に、私はこう言いました。

「勝っても、負けても、全校のみんなが一つのことに向かって取り組んできたことを、たたえ合って、ほめ合って、認め合って、すがすがしく、さわやかなものにしてほしいと願います。一生懸命、真剣な姿は、美しく、カッコいい。また、クラスが一つになろうとする心に触れるのもまた、美しく、素晴らしい。見る人の心を打つ、そういう体育大会を全員の力で作り上げよう」

この言葉通りに、本当にすがすがしく、さわやかなものになりました。生徒の素直さと純粋さ、そして、いちずでひたむきな姿勢に、本当に心が動かされました。



初めて全学年で取り組んだ一本ムカデ。体育大会前には、3年生から「なんで、1年も、2年も、一本ムカデなん？」と、批判的な声も上がっていたのですが、なんのなんの。3年生の力強い疾走は、1・2年生のムカデ

の走りを圧倒していました。それより、一本ムカデにしたせいか、1年生までもが、ムカデレースの前に、クラスみんなで円陣を組んで、エールをかけ合っているのです。「団結」という言葉が古めかしく感じる昨今ですが、こういうことを生徒たちは求めているんだ、という気づきを与えてくれる場面でした。



それから、競技を観戦していて心を打ったのは、生徒一人ひとりの真剣なまなざしです。力を抜いている生徒は一人もいません。勝っても、負けても、一生懸命なのです。ど真剣なのです。そして、終わったあとには、きまって笑顔なのです。3年生も、2年生も、1年生も。これが、求めてきた中学生の体育大会だと思わずにはいられませんでした。

さらに続けます。3年生の学年競技、「大縄」の時のことです。「1回、2回、3回、……」と、後輩たちが大声で、懸命に応援しているのです。失敗すると、自分のクラスのことのように「あ〜」とため息がグラウンドに流れます。そしてまた、「1回、2回、……」と、声援の輪が広がっていきます。本当に感動しました。こうした熱い声援は、何も「大縄」に限ったことではありませんでした。学級対抗リレーや色別対抗リレーなどにも、声援が絶えずグラウンドに響いていました。先輩や仲間、あるいは後輩に惜しみなく声援を送ろうとする心が、一生懸命に、真剣に競技に向かおうとする競技者の心につながっていったのかもしれない。いや、真剣に、懸命に競技に臨もうとしているからこそ、心からの声援がわき起こっていったのかもしれない。そういう生徒全員の相乗作用で体育大会はつくられていったようです。

そして、やっぱり2年の学年競技、「ハリケーン」でのあの光景は、忘れることができません。思いもよらず、競技中に竹が折れてしまったのです。代わりのものを持ってこようとした矢先、そのクラスは誰からともなく、不利益をアピールするでもなく、その折れた竹で必死になって競技を続けたのです。結局、そのクラスは最下位に終わってしまいました。競技結果のアナウンスが流れた瞬間、自分たちのクラスに惜しみなく拍手を送っているのです。勝ち負けにこだわることなく、本当に潔いクラスだと思いました。閉会式でも私は、そのさわやかなクラスに、心からの賛辞を送りました。



まだ暑さの残る一日でしたが、たくさんの保護者の方にご参観いただき、温かい声援を頂戴しました。参観された保護者のみなさんにも、私と同じように、すがすがしく、さわやかな四中の体育大会に映っていたら、この上なく幸せに感じます。ご声援、ありがとうございました。